

2011年 5月12日・岐阜新聞「分水嶺」欄では

「風が本を読んどるよ」。机の上に開かれた本。開け放たれた窓からの風で、本のページがめくれる。この一瞬を子供は詩人の言葉で表現する▼時に子供たちは大人が驚くような直観で物事を観察する。小さな詩人の、かくもきらめく瞳にこの世界はどう映っているのだろうか▼福島県南相馬市の元教師、若松丈太郎さんも一人の詩人だ。福島原発が立地した40年前から、その直観を基に詩作で警鐘を鳴らし続けてきた。そして3・11による原発事故。直後に出版された「福島原発難民」は以下の予言に満ちている▼一九八八年 わたしの頭髪や体毛がいききに抜け落ちた 一九八四年 臨界状態のため緊急停止 二〇〇七年 事故の隠蔽をようやく認める サーファーの姿もフェリーの影もない 世界の音は絶え 南からの風が肌にまとう われわれが視ているものはなにか▼最悪の事態とは次のようなものも言うのではなかろうか 生まれてこのかたなじんできた風土、共同体、家、土地を村ぐるみ、町ぐるみで置き去りにすることを強制され…▼詩人の予言の紹介はここまでで十分だろう。たった2時間の一時帰宅で、餓死させてしまった愛犬を弔うこともできない避難民。テレビが映し出す光景は、詩人の予言を単に後追いしているのに過ぎない。

と紹介されています。